

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 博士論文概要

「待遇コミュニケーション」における  
「敬語表現化」の考察  
待遇表現教育の観点から

金 東奎

2006年3月

## 「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」

### 1. 問題提起

ある言葉や表現を「敬語」や「敬語表現」にするには、語句の形を変えるだけでは十分ではない。ただ敬語に変えるだけでは、何かが不足しているように感じられる場合がある。それは、筆者が2001年に実施した日本語学習者2名を対象とした「敬語」や「敬語表現」に対する意識・使用様相に関するインタビューからも確認できる。本稿は、そのような問題意識から、実際のコミュニケーションを視野に入れた「文話」における「敬語表現」の問題（「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の問題）について考えている。「敬語」や「敬語表現」を考えるには、語・文単位にととまらず、「文話」を視野にいれた接近が必要であると思われる。「文話」を視野に入れた観点として本稿で取り入れたのが「待遇コミュニケーション」(蒲谷(2003))という観点である。

本稿はコミュニケーション主体(学習者)の頭のなかの事柄を「敬語表現化」する過程はどのようなものなのか、また、その過程にはどのようなことを考える必要があるかについて分析・考察を行うものである。

本稿はコミュニケーションを「適切な」ものにするために必要と考えられる「敬語表現」の生成過程としての「敬語表現化」の問題について考察を行った。また、日本語における「敬語表現」「敬語表現化」の問題を見直すことにより、日本語教育、特に待遇表現教育におけるひとつの考え方 指標を提示することを目標とする。

従来の敬語教育および待遇表現教育は、敬語の語レベルとしての形式や語彙としての教育に焦点を当てた場合が多かった。特に、学習者が「敬語」「敬語表現」に触れるきっかけとなる日本語教科書の場合、初級段階の後半に敬語の語形をまとめて提示する方法や授受表現の導入の一環として「敬語」「敬語表現」を提示する場合が多い。また、敬語および待遇表現教育の研究においても、語形の提示順序やロールプレイなどの役割ゲームを通じた敬語の使い方に関する考察・報告が多かったと思われる。

しかし、実際に「敬語表現」によるコミュニケーション場面では、必ずしも「敬語」の語形の習得や語彙の獲得だけで「敬語表現」が使用できるようになるとは限らないであろう。単なる語形の指導、学習だけでは、「敬語表現」を表現、理解する過程で考慮しなければいけない様々で複雑な項目に対する認識が不足しやすくなり、「場」や「人間関係」に対して適切に対応できなくなるおそれがある。

上述したような学習者における「敬語表現化」の問題点を解決するためのひとつの方法として、「敬語表現」の生成過程および表現行為という側面からみた「敬語表現化」の問題を明確にする必要があると思われる。しかし、「敬語表現」を生成する過程は、「主体」である学習者の頭の中で行われることであり、また、個人的な考えや性格など、個別性の問題も絡んでいるため、一言ですべてを明確にすることは困難であると思われる。しかし、本稿では、表現主体の立場から「敬語表現化」を考える際の過程を提示することによって、「敬語表現」研究および待遇表現教育を考えるためのひとつの考え方 指標を提示したいと思う。

## 2. 「敬語表現化」の概要

### 2.1 「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の概要

「待遇コミュニケーション」は、ある「意図」を持った「コミュニケーション主体」がある「場面」において「文話」単位で行う「表現」「理解」の「行為」のことである（蒲谷（2003））。「待遇コミュニケーション」は、コミュニケーションにおける主体を明確にし、その主体における「意図」や「場面」などの主体を取り囲む諸状況における認識などに注目した考え方であり、さらに、実際の使用を念頭においた「文話」単位での「表現」「理解」行為を前提としている。このような規定および考え方は、本稿における「敬語表現化」を考えるのにも有効であると判断し、「敬語表現化」における主な理論的概念として取り入れた。

具体的には、「意図」の存在、「コミュニケーション主体」の想定、「場面」における認識、「文話」を単位として設定、「表現」行為における認識などの点が「敬語表現化」における理論的な背景となる。

「待遇コミュニケーション」の観点から「敬語表現化」を考える場合、「自分」という主体があり、「相手」という主体との関係や「場面」（「人間関係」と「場」の総称。蒲谷・川口・坂本（1998））との関係などのために「敬語表現化」を行うという観点から「敬語表現」について考えることができるため、「待遇コミュニケーション」からの観点は本稿における「敬語表現化」において重要な意味をなしている。特に、「相手」を「高く」待遇する、「相手」に丁寧にする、「相手」との関係を「適切な」ものにする、といった「敬語」「敬語表現」の基本的な性質から考えた場合、「相手」の存在を意識した主体の設定や「場

面」に対する認識、「文話」単位での分析・考察は必要不可欠なものとなるだろう。さらに、「待遇コミュニケーション」からの観点は、「敬語表現」（「敬語表現化」）を言語行為における材料としての面ではなく、行為のひとつとして捉えることができるため、「敬語表現化」における諸状況や諸要素に対する分析・考察のための足掛かりになっていると言える。

## 2.2 「敬語」「敬語表現」の概要

待遇表現には、「相手」を高くする、あるいは、「場」を改まったものにする方向もあれば、「相手」を貶める、あるいは「場」をくだけたものにするような方向もある。それらをまとめて「待遇表現」というのが一般的な呼び方であるが、「敬語」「敬語表現」は、「待遇表現」の一部で、「相手」（あるいは「話題の人物」）に「尊重」の気持ち（あるいは「敬意」など）を丁寧な言い方によって示すものであるとしている。（窪田・池尾（1971））

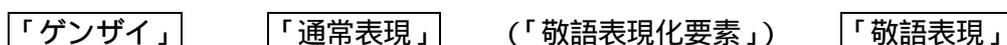
本稿では上の規定をもとに「敬語表現」を捉えている。ただし、「敬語表現化」の過程については、語や語彙レベルではなく、「文話」レベルでの使用を前提に考えるという点から、「敬語」ではなく「敬語表現」という用語を用いている。

本稿における「敬語表現」は、「事柄（内容）の伝達」のために「丁寧な気持ち」「尊重の意識」などの「敬語的な要素」を加えた「意味を伝達するもの」として規定している。さらに、「敬語表現」は、「敬語表現」でない表現を「通常表現」と呼ぶと、「通常表現」に対する概念でもある。

## 2.3 「敬語表現化」の概要

「敬語表現化」は、主体の頭の中に存在する「内言」としての「言材」と「ゲンザイ」によって構成された「内言」としての「通常表現」に「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の「敬語表現化要素」を総合的に働かせ、「敬語表現」として「外言化」させる一連の過程である（金（2005））。図1は本稿における「敬語表現化」の過程を簡略化したモデルである。

図1) 「敬語表現化過程」（「ゲンザイ」「通常表現」を適用したモデル）



### 3. 「敬語表現化過程」

#### 3.1 「内言」と「外言」

「内言」とはコミュニケーション主体（本稿では「学習者」を主体として考える）の頭のなかのもの（考え・思考内容：細川（2004））で、まだ音声化・文字化されていない段階の概念のこととして規定しておく。「内言」はある事柄に対して言語化する前の段階で主体の頭のなかに存在する言語化における概念のことで、概念として、あるいは概念より具体的な形である語、文、「文話」で存在する場合もあると思われる。

一方、「外言」は「内言」に対する述語で、主体が「内言」をある過程によって具現化したもの、つまり、音声化・文字化したものとして規定しておく。「外言」は主体が「内言」をある過程を通じて具現化したものとして考える。

「敬語表現化」の過程における「内言」と「外言」の問題と「内言」の具現化の問題は、「敬語」「敬語表現」でない「非敬語」「非敬語表現」をどのようにして「敬語」「敬語表現」にするか、さらに、「敬語」「敬語表現」をどのような過程を経て生成させるのかを考える際に、重要な意味を持っていると思われる。

しかし、「内言」は人間の頭脳のなかで現象であるため、把握・計測などは困難であり、個人的且つ個別的な性質を持っている（細川（2004））。しかし、本稿ではこのような「内言」の性質を踏まえた上で、「敬語表現化」の過程における「内言」の存在（「外言」の問題と「内言」の具現化の問題を含めて）を考えているが、それは、できあがったもの、「外言」としての「通常表現」に言語形式（敬語形式）を置き換えるだけの「敬語表現化」ではなく、主体の頭のなかの「考え」から「敬語表現化」の過程は始まっているというスタンスで「敬語表現」の問題に接近することを本稿の目的としているからである。上で述べた通り、「内言」の具現化の問題はその把握・計測が困難であるが、「外言化」されたものからその「内言」を探っておくことは可能であり、これは日本語教育においても証明されたことである（細川（2004））。このように「外言化」されたものから「さかのぼって敬語表現化の過程を考える」という考え方は、本稿の第 4 章の部分、つまり「敬語表現化」をどのように実際の「敬語表現」研究に適用させるかといった試みにおける基本的なスタンスになっている。（詳しくは第 4 章を参照）

さらに、実際のコミュニケーションの場合を考えると、「内言」と「外言」は一回かぎりの関係・過程ではなく、「内言」から「外言」へ、また、「外言」から「内言」へ、といっ

た過程を絶えず繰り返しているといえる(「往還関係」: 細川(2004))。しかし、本稿では、「表現行為」にポイントを置いているため、「表現」の過程、つまり「内言」から「外言」への過程に注目している。特に本稿では、内言」の「外言化」の過程における「場面」・状況の解釈の必要性に着目し、それらを「敬語表現化」過程における「敬語表現化要素」として認識(命名)している。その「敬語表現化要素」を「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の三つの項目に細かく分類し、精密な分析・考察を行っている。(第 4 章の 4 節以降)

このような「内言」と「外言」の関係、「内言」の具現化に過程に対する十分な認識は、「敬語」「敬語表現」の指導・学習における学習者および指導側の問題点を解決する手がかりのひとつになると思われる。

### 3.2 「内言」としての「言材」 「ゲンザイ」

蒲谷(2003)は、「言材」は、<個々の主体における、音概念・文字概念と表象・概念との回路>で、簡潔には<抽象的なレベルでの「言葉」(ことば)>のことであるとしている。また、「主体」がその「言材」をどのようなものとして捉え、選択するのか、その結果、どのような「言材」によって「語」から「文話」までが成り立っているのが、重要な点となると指摘している。

「敬語表現化」における「内言」としての「言材」 「ゲンザイ」は、上記の規定をもとに考えている。「ゲンザイ」は、言語行為(特に「敬語表現化」)におけるすべての主体個人が「内言」として持っており、さらに、「ゲンザイ」は、言語(あるいは言語行為)における情報として、また「内言」の「外言化」におけるコトバの材料としての性質を持っていると考えている。また、「ゲンザイ」は、「通常表現」を組み立てる際の本質となるものとして、またコトバの材料やコトバの回路として働くものであると考えている。

### 3.3 「内言」としての「通常表現」 「通常表現」

主体の表現したい(あるいは、理解する)内容について「ゲンザイ」を組み立てることによって具現化された(あるいは、具現化した)ものを「内言」としての「通常表現」「通常表現」として規定する。「通常表現」は、「先生のお考えはいかがでしょう。」といった「敬語表現」に対し、「先生の考えはどうか。」といった「外言」としての通常表現(あるいは、「非敬語表現」)のように具現化された「具体的なもの」ではなく、「センセイノカ

ンガエハドウカ」のように、「内言」として主体の頭のなかに存在する抽象的なもので、まだ具現化されていない中間的な性質のものとして考える。コトバの材料・回路である「ゲンザイ」よりは具体的なものであるが、具現化されたものではなく、まだ「内言」として存在しているものとして考える。

つまり、本稿では、コトバの材料・回路である「ゲンザイ」を主体の「意図」や主体を取り囲む諸状況に対する認識をもとに、「敬語表現化」のために、また「敬語表現」のもとになるものとして、主体が頭の中で組み立てたものを「通常表現」として考えている。「敬語表現化」における「内言」の具体化、意図している事柄の具体化、「意味伝達」の中核としての意義を持っている「通常表現」は、「敬語表現化」の過程を考える際、注目したい概念である。

### 3.4 「敬語表現化」における「敬語表現化要素」

「通常表現」が主体の頭のなかに「内言」として存在しており、それを「外言」にする過程を「敬語表現化」の過程として考えているが、このような「通常表現」を「外言化」する「敬語表現化」するためにはどのようにすればいいだろうか。単に「通常表現」を具現化 音声化・文字化するだけでは「適切な敬語表現」にならない場合が多いため、主体は、自分が直面している諸状況に対して「適切な」認識・判断をする必要がある。

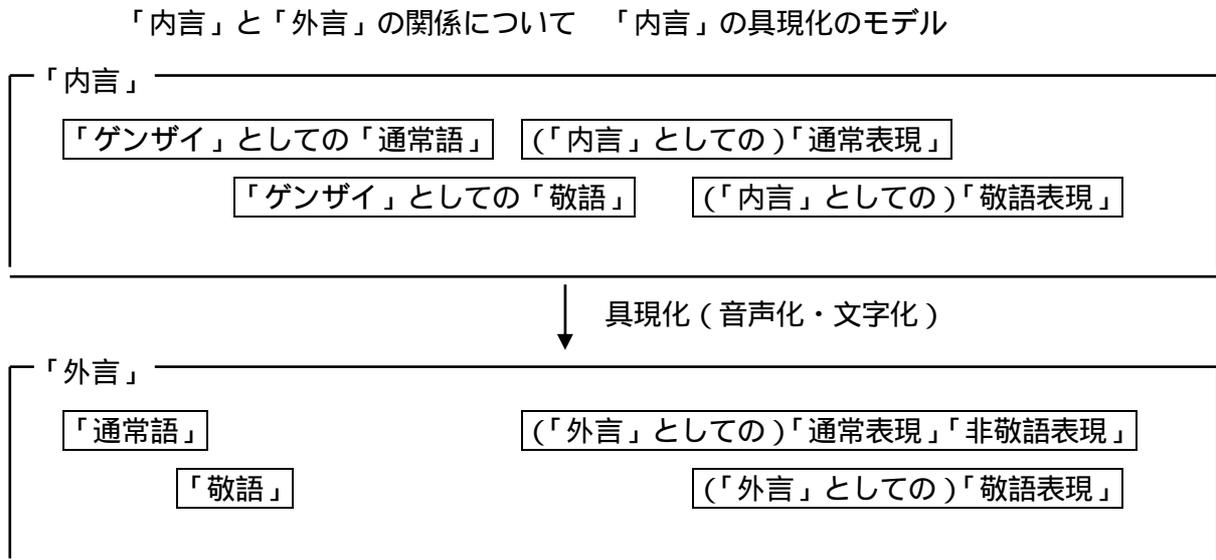
このように「適切な敬語表現化」のために考えなければならない諸項目のことを「敬語表現化要素」として規定している。本稿における「敬語表現化要素」は大きく三つの項目に分けられる。「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の三つがそれである。

### 3.5 「敬語表現化過程」と「敬語表現化」

#### 3.5.1 「敬語表現化過程」

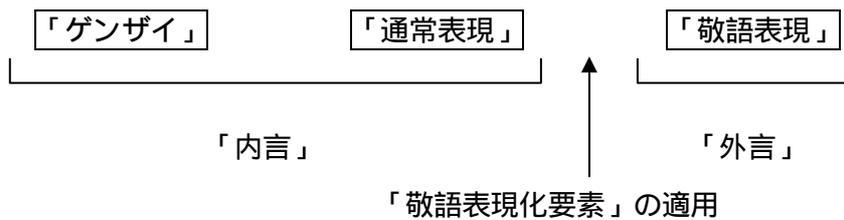
「内言」を「外言」にする過程という観点から「敬語表現化」の過程を考えた場合、「ゲンザイとしての通常語・内言としての通常表現」「ゲンザイとしての敬語」から「敬語表現」への過程が考えられ、「外言」から「外言」への「敬語表現化」を考えた場合は、「通常語」「外言としての通常表現・非敬語表現」「敬語」から「敬語表現」への過程が考えられる。次の図2はそのような過程を簡略化し、モデルとして表したものである。

図2)「敬語表現化過程」モデル図



次の図3)は、図2)をもとに確認した本稿における「敬語表現化」の過程を示したものである。「内言」としてのコトバの材料である「ゲンザイ」と「ゲンザイ」を組み立てることによって形成された(した)「内言」としての「通常表現」に「敬語表現化要素」を総合的に働かせ、「外言」としての「敬語表現」を完遂させるという一連の過程を簡略化して示したモデルである。

図3)「敬語表現化」の過程



### 3.5.2 「敬語表現化」の例 「敬語表現化」の実際について

様々な「敬語表現化」の例について具体的な例をあげて確認した。(本文参照)

様々な「敬語表現化」の過程における要素について考慮する、また、「内言」をそのまま具現化する「敬語表現化」するのではなく、主体の直面する諸状況に合わせて、また、主体の諸状況に対する解釈(意識・認識など)をもとに「内言」の具現化の形を変化させることが本稿における「敬語表現化」に基づいた考え方である。

#### 4. 「敬語表現化要素」

##### 4.1 「敬語表現意識」

「敬語表現意識」は、ある事柄を「敬語表現化」することに関する主体の自覚的意識のこととして規定する。「敬語表現意識」は「敬語表現化過程」における「内言」としての「通常表現」を「敬語表現」にする過程で「通常表現」を「敬語表現化」するために働く（働かせる）ひとつの概念である。「敬語表現意識」は、コミュニケーション主体 学習者が直面して得る諸状況に対する「意識」のことである。

「敬語表現意識」の問題として、「敬語表現意図」の問題、「尊重」の意識の問題、「敬語」「敬語表現」の普遍性における認識の問題と「敬語表現教育」への適用の問題について分析・考察を行った。

##### 4.2 「敬語表現認識」

「敬語表現認識」は、ある事柄を「敬語表現化」する過程において、主体に（が）かかる諸状況に対する認識の問題である。「敬語表現化」における「人間関係」「場」「内容」などに対する具体的な且つ個別的な認識の問題を本節で述べている。

「敬語表現認識」の問題として、「上下」「親疎」「立場・役割」の三つの軸を中心に考える「人間関係」の問題、「あらたまり・くだけ」「時空」の二つの軸を中心に考える「場」の問題、および「題材・内容」の問題とストラテジーにおける認識の問題と「敬語表現教育」への適用の問題について分析・考察を行った。

##### 4.3 「敬語知識」

「敬語知識」は、ある事柄を「敬語表現化」する過程に必要な「敬語」「敬語表現」に関する知識、情報の問題である。本節では、言語的なバリエーションの問題、適切な表現の問題や文法の正誤の問題などについて確認した。

「敬語知識」の問題として、「丁寧語」とその周辺の問題、「オ・ゴ~ダ」とその周辺の問題、「オ・ゴ~ニナル」と「レル・ラレル」の使用の問題、「オ・ゴ~スル」の使用の問題および「敬語表現教育」への適用の問題について分析・考察を行った。

## 5.まとめ

章では、「文話」(コミュニケーション)における「主体」の存在、「主体」の「意図」、「主体」を取り囲む諸状況に対する認識などの観点から「敬語表現化」の過程について分析・考察を試みた。本稿における「敬語表現化」は、コミュニケーションの主体としての学習者の頭のなかの「内言」を具現化する(「外言」にする)過程に注目している。「待遇コミュニケーション」という観点から接近しているが、主に分析・考察の対象としているのは「表現主体」における「表現行為」、「表現行為」における過程の問題である。本来、コミュニケーション(「待遇コミュニケーション」)を観点としているならば、「表現」と「理解」の両目を研究の対象にしなければならないが、本稿では、「表現主体」の「敬語表現化」の過程の問題に注目しているため、「表現の問題」にポイントおいて分析・考察を行った。

第 章では、「内言」として存在するコトバの材料、あるいはコトバの回路である「ゲンザイ」とその「ゲンザイ」を具現化のために組み立てた「内言」としての「通常表現」に「敬語表現化要素」(「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」)を適用させ、「敬語表現化」を完遂させる一連の過程である「敬語表現化」の概念、意義、および具体的問題について分析・考察を行った。「ゲンザイ」を具現化し、「敬語表現化」を行う過程で考えなければならない諸項目を「敬語表現化要素」とし、さらに、その「敬語表現化要素」を三つにわけて考えた。「敬語表現化」における意識の問題 「尊重」の意識・「相手」に対する「配慮」の意識・「敬語表現」の普遍性における意識など である「敬語表現化意識」、「敬語表現化」における認識の問題 「人間関係」「場」「題材・内容」「ストラテジー」に対する認識など である「敬語表現化認識」、「敬語表現化」における言語的な知識 敬語形式の性質・運用における知識 である「敬語知識」の三つの項目を立て、それらを「敬語表現化」に適切に適用させることによって「敬語表現化」が完遂されるという考え方を提示した。しかし、実際の日本語を用いた「敬語表現化」の問題を考えた際、本稿で提示している「敬語表現化要素」の三つの項目が「敬語表現化」に必要な項目のすべてではないだろう。他にも声量・話し方などの音声的な問題や身振り・手振りなどの非言語的な要素などが「敬語表現化」においては重要な役割をしていると考えられるが、本稿では、言語的な様相と主体を取り囲む諸状況の問題に注目をし、「敬語表現化」の問題について分析・考察を行った。

人間の言語行為といった大きな観点から考えると、本稿で述べている「敬語表現化」の考え方は、一部における分析・考察ではあるが、先行研究における語・句レベルの「敬語

化」の問題や「表現」の語形を変えるだけの「敬語表現化」の問題に捉われず、さらに「文話」を単位として、主体の「敬語表現」における「内言」の性質と「敬語表現化」のための様々な要素の働きに注目した「敬語表現化」という考え方は、「敬語表現」の研究や「敬語表現教育」を考えるためのひとつの指標としての意味を持っていると思われる。

待遇表現教育における「敬語表現化」の適用と「文話」における「敬語表現化」の諸相  
章では、「敬語表現化」の日本語教育 実際の教室活動への適用の問題と「文話」における「敬語表現化」の様相について分析・考察を行った。第 章における「敬語表現化」という考え方を実際の日本語教育の現場にはどのように適用することができるのか、また、実際の日本語研究 「敬語表現」の研究にはどのように適用することができるのかという点について「表現行為」の観点から論じている。

#### 1. 実際の教室活動への適用へ向けて

「敬語表現化」の過程および「敬語表現化要素」の問題は、待遇表現教育のために考えなければならない項目の一つであると思われる。本節では、実際の待遇表現教育、特に実際の教室活動での適用の問題について論じた。

「チャンピオンスピーチ」(川口(2003))の部分では、「チャンピオンスピーチ」における一般成人同士の「人間関係」の設定の問題、スピーチといった「あらたまった場」の設定の問題、スピーチにおける「丁寧語」「丁寧文体」の導入から見た実際の教室活動への適用の問題について「敬語表現化」の観点から分析を行った。さらに、「だれが」「だれに向かって」などのことを学習者側に認識させ、また、教師側はそれらを精緻に記述・認識することによって(中級)会話練習をより有効なものにすることができるという、川口(2005)の「談話記述の精緻化」の概念に基づき、実際の教室活動における「敬語表現化」の考え方の適用の問題についても述べている。

筆者が実際に担当した「日本語5B」「日本語6B」「IC5-1A」の「発表会」について述べた部分では、発表者と聴衆といった一般成人同士の「人間関係」の設定の問題、発表者と聴衆の「人間関係」の設定における「立場・役割」の認識の問題、ゲストの投入を通じた「人間関係」に対する認識の問題、司会者としての「立場・役割」および「丁寧語」「丁寧文体」の使用などを通じた実際の教室活動への適用の問題について「敬語表現化」の観点から分析・考察を行った。

## 2. 「敬語表現化」から見た表現行為における問題 「手紙文」「スピーチ」から見た敬語接頭辞「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」の使用様相に関する分析・考察

「手紙文」と「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」の問題 「敬語表現化」の様相について本節の前半では、「直接尊重表現」と「間接尊重表現」といった敬語形式を中心に、後半では「手紙文」と「スピーチ」における「人間関係」や「題材・内容」などの「敬語表現化要素」を中心にして分析・考察を行った。「手紙文」と「スピーチ」における「オ・ゴ」を用いた「敬語表現化」や「敬語表現」の使用様相に関する一部の分析・考察であるが、敬語接頭辞「オ・ゴ」の付け方の問題ではなく、「オ・ゴ」を用いた「敬語表現」が「手紙文」「スピーチ」においてどのような使用様相を表しているのか、また、「オ・ゴ」を用いた「手紙文」「スピーチ」における「敬語表現化」には、どのような（「敬語表現化」における）意識が働いているのかについて分析、考察を行なった点と「敬語表現化」の過程からの接近（「外言化」されたものから「内言」へさかのぼって考えていく）を試みたという点に本節の意義を置きたいと思う。

## 3. 「敬語表現化」から見た表現行為における問題 「敬語表現化」における「オ願イシマス」に関する一考察

「敬語表現化」の観点からみた「オ願イシマス」の使用様相について分析・考察を行った。「願ウ」の「間接尊重語」としての「敬語表現化」の面、「指示表現」と「依頼表現」の中間的性質を持った「敬語表現化」の面、主体同士の「当然性」の高い場合、共通の認識の「確認」としての「敬語表現化」の面、「あいさつ」としての性質を持った「敬語表現化」の面を中心に「敬語表現化」における「オ願イシマス」の使用様相について分析・考察を行った。さらに、「オ願イシマス」の「敬語表現化」における意識の問題として、「人間関係」に関する意識、「恩恵」に関する意識、「丁寧な」表現としての意識、他の表現との関係における意識、間接的表現としての意識について分析・考察を行った。

本節も2節と同様、「オ願イシマス」から見た「敬語表現化」における意識・認識などに対する分析・考察の点と「敬語表現化」の過程からの接近を試みた点に本節の意義をおきたいと思う。

#### 4. まとめ

第 章では、第 章の「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の問題に対する考え方をもとに、待遇表現教育（「敬語表現教育」）における「敬語表現化」の考え方の適用の問題と「文話」における「敬語表現化」の諸相について述べた。

第 章は、第 章で確認した「敬語表現化」の概念とその過程、さらに「敬語表現化」という考え方や視点をどのように実際の日本語授業や研究（「敬語研究」「敬語表現研究」）に適用するかを考えるための試みとしての一面を持っている。第 章の「理論」をどのように「実際の日本語授業」と「実際の日本語（「敬語表現」）の研究」に適用するかという問題については、ひとつの例を提示することができたのではないかと思われる。

特に 2 節と 3 節は、主に「表現主体」の「表現行為」に注目した分析・考察になっている。「待遇コミュニケーション」という観点から考えれば表現と理解の両面から考える必要があるが、本稿は、「言語行為」を行う「表現主体」の「表現行為」、その中でも「敬語表現」を生成させる「敬語表現化」の問題に注目しているため、分析・考察の対象や観点は「表現行為」「敬語表現化」の問題に限定させた。コミュニケーションの観点からみると一部に対する分析・考察ではあるが、従来の語・文単位で捉える「敬語」「敬語表現」の観点ではなく、「表現主体」の「表現行為」という観点、特に「敬語表現」を行うために意識・認識しなければならない諸項目について考えるという観点から接近したことによって、「敬語表現」研究におけるひとつの考え方 指標を提示することができたのではないかと考えている。

今後は、 章における「敬語表現化」と「敬語表現化過程」の概念をどのように待遇表現教育「敬語表現」教育に適用させるかといった点、またどのように待遇表現研究「敬語表現」の研究に適用させるかといった点についてさらに資料を収集し、分析・考察を行いたい。また、表現だけでなく理解の側面からみた「敬語表現」への接近も課題として残っているが、それらの問題についても今後の課題として考えていきたい。

以上